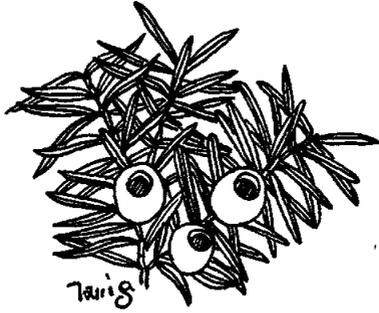


最近、自然保護の立場から、動植物採集の是非が論じられるようになってきた。採集と観察、これは本来互にあいおぎない合っていることがらであり、採集を禁止すべしという論には確かに賛成しがたい。以下、採集禁止の論拠を紹介しながら私見をのべてみたい。

まず採集禁止の第一の理由は、最近ようやく反対論も強くさげられるようになってきたとはいえず、恐るべきいきおいで進みつつある自然破壊の一端の責を動植物採集がになつていっているのではなにかというのではなからうかと思ふ。しかし自然破壊の真の原因は決して動植物採集にあるのではなく、巨大な資本をバックとした



## 採集と観察

野 田 四 郎

営利的事業にあることは明らかである。これに対し、たとえその量がわずかであっても採集は、やはり自然を破壊する行為であることにちがいはないという反論もあろう。

だが自然界において生まれる次の世代の個体数は、親の世代に比べ、また実際に生存してさらに次の世代を生むことのできる個体数に比べ、普通ははるかに多

い。自然は保護すべきであるという根拠の一つは、人間の行為によって自然界における物質循環のパターンを破壊し、平衡を破ることは、人間自身の生存をおびやかすからであると私は考えるが、この点からみると採集によってもたらされる個体数の減少は自然界において淘汰される膨大な数の個体に埋没し実際にはその種の生存の大きな圧力とはなりえない。

もっとも、個体数が非常に少なくまた生殖能力のおとろえた種については、たとえわずかな採集によってもその種の生存に大きな影響を及ぼすおそれがあるから、採集をいまいしめることに反対ではないし、またたとえ子供がおこなう採集であっても、営利を目的とするものもあってのほかで、後にのべる採集本来の趣旨からもこれを認めることはできない。しかし衰退しつつある種の衰退の主な原因は、はじめにのべたごとく営利目的のための乱獲や自然環境の破壊であって、これを止めなければ採集をやめたところで種の生存が安泰になるわけではないことを指摘しておきたい。

次にあげられるのは自然認識の手段としての採集がもつ効果、あるいは役割であらう。採集に反対する人達は、動植物の採集からは本当の自然認識はうまれないうという。つみとられ押し棄にされた植

物、あるいはビンで箱にとめられた昆虫

からは、決して生きた生物の営みを知ることができない。したがって小・中学生の自然認識の手段としては、採集より生きた生物の観察の方がはるかにまさる。

しかも多くの場合採集はただ集めることのみが目的となり、たとえば夏休みの宿題として提出したあとほうちやられてしまうのが関の山であるから、その点においても採集は無益な殺生にすぎないという。たしかにこのような指摘はある面については正しいと思う。標本にされた生物は決して生きた生物の生活をみせてくれないし、その標本もほとんどの場合かえりみられないのが実状であろう。しかし子供の学習は本来遊びの要素を多くふくむものであり、一見無駄なようにみえることがが実は非常に大きな意味をもつ。なるほど子供のおこなう採集は分類学者がおこなうようにはつきりとした目的意識に支えられたものではないが、一時的な気まぐれにみえる興味にかられて行行行為も、また有形無形の効果をもたらす。これは単に子供の行為にかぎらず、人間の生活において功利的な目的から一歩しりぞいた遊びの精神が、文化的向上に大きな影響をおよぼしたことも、

また事実なのである。

はつきりとした目的をもつ行為だけを認め、無駄のない能率的な行動だけを善とするゆとりのない狭い考えが、実は現在の自然破壊をもたらした原因であるといつては言いすぎであろうか。開発が自然保護かという二者択一的な物の考え方の根本は、けつきよく遊びの精神をうしない、高度経済成長すなわち能率社会を唯一の善であるとする考え方にほかならないようにおもう。もちろんこういってからといって、私は自然保護の精神は遊びであるなどといっているのではなく、

目先の利益だけにとらわれない広い視野が必要であるという意味であるが、いまここではあまり深入りしないでおこう。私ははじめに採集と観察は互いに相おぎなうものであるといったが、採集は自然認識においていわば静的な側面を受けもち、観察や実験は動的側面を受けもっているといつてもよいであろう。自然界において現実には生活を営んでいる生物の姿は標本からではなく、観察によつてはじめて知りうることは当然のことである。しかしその生活している種、あるいは個体そのものの同定は直接手にとつて解剖し分解しなければならぬし、また

手にとつてしらべることにより、はじめに機能と形態の関係を知らることができるといふこともまた正しい。このようなある事象における静的側面と動的側面の関係は、単に生物を対象としたときだけにみられるものではない。

最近、理科教育の現代化というスローガンのもとに小・中・高校における理科教育のカリキュラムが大幅にかえられた。個々の記述をさげ変化に目をむけなければならぬ、単なる知識の蓄積ではなく探究の過程を重視しなければならぬといわれてきた。たしかにその目標自体は誤りではないかもしれないが、現実のカリキュラムの中では個々の事象に関する知識や記述は軽視され、すなわち静的な基礎事実が軽視されたために全体としてまとまりがつかず、せつかくの探究の過程は単なるスローガンに終つたようにおもう。

私はかつて高等学校で生物の授業を担当したが、そのとき市販のチューリップの観察をさせたことがある。そのチューリップの中にはメシベの形や花びらの数などが普通のものとは異なる個体がずい分まざつていた。そのときある生徒が、学校でおこなう授業でこのような奇形の

チューリップを用いるのはけしからんと憤慨したのを、いまでもおぼえている。その生徒は、チューリップの花はかくあらねばならないという固定観念から一歩もでることができず、その花もまたチューリップであるという事実を受け入れることができなかったのである。

自然は決して教科書に書かれたようなものではなく、実に多様であるといふことを認識するためにも、特に少年期においてはやはり個々の個体を手にとり、むしつてみるという採集や素朴な遊びが重視されなければならない。採集を否定する人達は、この手にとつてしらべてみるという基本的行為がもつ重要性を十分理解せず、大人の頭で考えた能率のよい自然認識のすじがきを無意識のうちに与えようとしているのではないだろうか。また個々の認識をなおざりにして失敗した理科教育の現代化とおなじ誤りをおかしているのではないだろうか。以上、思いつくままに私見をのべたが、十分な時間がないため採集反対論の文献をしらべることができず、あるいは十分な反論とはなっていないかもしれないが、採集を肯定する私の意見については理解していただけるものと思う。